

令和 5 年 6 月 19 日現在

機関番号：32636

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2022

課題番号：18K12224

研究課題名（和文）明治・大正期のオペラ受容における日本語創作音楽劇の位置づけに関する研究

研究課題名（英文）Re-evaluating the works written in Japanese in the history of musical theatre reception in the Meiji and Taisho eras

研究代表者

大西 由紀 (ONISHI, Yuki)

大東文化大学・文学部・講師

研究者番号：20794176

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では明治30年代後半から大正期にかけて、西洋のオペラの刺激を受けて書かれたさまざまな日本語創作音楽劇について、主に台本と同時代批評の分析を行った。具体的な研究対象としては、（イ）坪内逍遙らによる一連の日本語創作音楽劇、（ロ）帝国劇場の女優劇のうち、洋楽曲の挿入された喜劇およびレビュー、（ハ）初期宝塚少女歌劇の上演作品、の各作品群を扱った。欧米作品の原語上演が主流となった現在では、これらの作品はオペラ受容史の記述の中で軽視されがちだが、西洋音楽の大衆への普及の過程ではこれらの作品が無視できない役割を果たしていたことを確認した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

（ロ）（ハ）の作品群を網羅的に調査した結果、直接・間接の影響関係や類似性が認められることを確認できた。特に注目を要する作品、他の文脈からの検討が必要な作品を抽出できたことで、今後の研究の道筋をつけた。一方（イ）の作品群は別系統に位置付けるべきであることを明確にした。

（ハ）については当初の想定よりも範囲を広げて、昭和19年までの上演演目を調査したところ、宝塚におけるレビューの受容と発展について、ファンの中で記憶されていた複数の節目の出来事について、文献の裏付けを与えられた。また、オペラ歌手や女優に対するステレオタイプの記述を整理したことで、今後の多方面からの研究に糸口を提供できたと考える。

研究成果の概要（英文）：This research project investigated various pieces of musical theatre written in Japanese in the first two decades of the 20th century, by close reading of the libretti and media coverage at their age. The works considered included (but not limited to) 1) the works of “new music drama” written by TSUBOUCHI Shoyo and his followers; 2) “actresses’ plays” at the Imperial Theatre, which featured light-hearted Western songs and dances; and 3) pieces of musical theatre performed by the Takarazuka Girls’ opera in the earliest stage of its 110-year history. Previous research had overlooked such a treasure trove of unique pieces, focusing more on the attempts to stage Western opera masterpieces with Japanese-translated libretti. Nevertheless, those pieces of musical theatre written in Japanese from scratch played significant roles in the history of opera reception in Japan.

研究分野：比較文学・文化

キーワード：日本語創作音楽劇 替え歌オペラ 宝塚少女歌劇 帝国劇場 アダプテーション プリマ・ドンナ 女優 オペラ

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

### 1. 研究開始当初の背景

本研究は明治30年台後半から大正期にかけて、西洋のオペラの刺激を受けて書かれたさまざまな日本語創作音楽劇を対象とし、台本と同時代批評の分析を通じて、これらの作品群を、日本のオペラ受容史の中に新たに位置づけることを目指して構想された。

研究代表者は博士論文(東京大学、2017年)において、日本において1900年前後から始まる西洋のオペラの受容の最初の約20年間を概観し、この時期には西洋の既存のオペラ・オペレッタの翻訳上演と、日本語による創作音楽劇の試みとが、並行して行われており、どちらも一般観客へのオペラの普及に重要な役割を果たしていたことを明らかにした。しかし研究代表者がもともと翻訳研究の出身であったことや、先行研究においても翻訳オペラの研究の方が進んでいたことなどが理由で、博士論文では翻訳オペラに比べて日本語創作音楽劇の掘り下げは不十分なまま終わってしまった。

こうした経緯から、本研究では明治・大正期の日本語創作音楽劇について、これまで日本のオペラ受容史において見落とされてきた作品をすくい上げ、その史的役割を検討することが企図された。

### 2. 研究の目的

本研究の当初の目的は以下に挙げるとおりであった。

- (1) 増井敬二『日本オペラ史～1952』(水曜社、2003年)などの従来の日本のオペラ史記述において見落とされてきた日本語創作音楽劇の試み、たとえば坪内逍遙による「新楽劇」のうち上演の実現しなかったものや、帝国劇場の女優劇の演目の中で洋楽曲を多く含む作品、宝塚少女歌劇の作品などを網羅的に調査し、作品の題材の広がりや作曲の傾向の特徴を明らかにする。
- (2) 網羅的調査の結果、とりわけ特徴を示しているとか、後世に影響を与えたなどと考えられる作品をいくつかピックアップし、詳細なテキスト分析を通じて、その歴史的意義を明らかにする。

### 3. 研究の方法

(1)については、まず対象となりうる作品の台本を網羅的に収集することから始めた。

坪内逍遙の新楽劇は『逍遙選集』(第一書房、1977～78年)に収められているが、初出と上演歴を確認し、一部であれ舞台にかけられた作品については、同時代の劇評なども調査した。

帝国女優劇のうち、益田太郎冠者によるものは、私家版の台本が早稲田大学演劇博物館(東京都新宿区)に所蔵されており、全作品についてコピーを入手した。それ以外の作者によるものは今回の研究では入手できなかった。上演歴は既存の上演年表やデータベース、月例興行の絵本筋書などで把握した。さらに、益田太郎冠者が創作上のヒントにしたと見られる20世紀初頭のロンドンのミュージック・ホールの演芸について、2020年2月に英ヴィクトリア&アルバート博物館演劇・パフォーマンスコレクションで資料調査を実施した。

宝塚少女歌劇の日本語創作歌劇は作品数が膨大であることから、既存の上演年表を用いて題材の傾向を確認した上で、重要と見られる作品についてのみ台本を入手することとした。今回の調査対象年代については、毎月の月例興行の上演演目の台本は『宝塚少女歌劇脚本集』という逐次刊行物にまとめられており、これは阪急文化財団池田文庫(大阪府池田市)や早稲田大学演劇博物館に所蔵されている。しかし、コロナ禍による資料所蔵館の休館や移動制限、研究代表者の職位変更に伴う研究環境の変化などの理由で、台本の調査および入手作業は2020年春頃から一時中断せざるを得なくなった。

ちょうどその時期に、国会図書館デジタルコレクション「歴史的音源」に、戦前期宝塚少女歌劇によるSPレコード音源が多数追加登録され、館内限定ながら公開されたことから、東京都内でアクセス可能な資料としてこれを網羅的に調査した。当初想定していた研究対象年代よりもやや時代のくだる、昭和戦前期の上演作品に関する資料が主ではあったが、日本語創作音楽劇に既存の欧米の流行曲などが挿入された事例を多数確認できた。昭和戦前期の演目の挿入曲については、偶然に古書市場で入手した楽譜資料も、結果的には重要な情報源となった。

こうした一次調査の段階を経て、(2)の個別作品を取り上げての分析段階に入った。

の作品群では、『墮天女』(1915年)と、これに山田耕筰が作曲した楽劇『墮ちたる天女』(1929年初演)について分析を行った。研究代表者が所属する早稲田大学総合研究機構オペラ/音楽劇研究所を拠点に、国内外の研究者と情報交換を行い、山田の楽劇の試演の可能性を探ったが、コロナ禍により断念することとなった。

については当初、単独で取り上げるに足る問題を見出しかねていた。当面できることとして、帝国女優に関する同時代のメディア報道を分析し、「女優」「プリマ・ドンナ」のステレオタイプなイメージを整理した上で、その着想源について考察を行った。

については、「サイエンス・ショウ」(1940年5月、雪組)の挿入曲の録音とピース譜を原曲と対照し、かつ台本と公演関連報道についても精読することで、1940年前後の宝塚少女歌劇

における西洋音楽受容のあり方と、時局の要請に表向き応えつつ華やかなショーを実現する作劇法とを確認した。この際に、「ショー」によって取って代わられることとなった前時代の形式である「レヴュー」についても、宝塚への移入史を再確認した。

調査を続ける中で、と の作品群の両者において繰り返し使われるプロットがあることに気がついた。さらに、日本で最初に一般の好劇家が西洋のオペレッタに触れる機会になったとされる歌舞伎の演目『漂流奇譚西洋劇』(1879年9月、新富座)も同じプロットを共有しているということに着目し、この演目と、と のそれぞれ代表的演目とを比較分析することで、音楽劇への西洋音楽の挿入の仕方や、西洋の文物を舞台上に描き出す際の意識のありように、時代が下るにつれて変化が生じていることを指摘した。

#### 4. 研究成果

本研究において明らかになったことと、その学術的・社会的意義は、主に以下のとおりである。

##### (1) 十五年戦争期の宝塚少女歌劇における欧米音楽受容のあり方の転換と上演時の工夫

宝塚少女歌劇は、岸田辰彌のフランス留学の成果である『吾が巴里よ(モン・パリ)』(1927年)の大当たり以降、フランス系の「レヴュー」の上演に力を入れてきた。しかし1930年代後半には、アメリカを視察した宇津秀夫らが、新たに「ショー」の導入を提案する。レヴューよりも場面ごとのつながりが薄く、出演者個々人の芸を重んじるこの形式は、当時アメリカで評判だったラジオシティ・ミュージックホールの出し物の影響を受けたものとされる。また、この時期の上演演目には、ハリウッドの最新映画の挿入曲の旋律を借用したものも多い。

演目におけるアメリカの影響が大きくなるこの時期は、しかし日本国がアメリカとの対立を深めていく時期でもあった。宝塚少女歌劇の公演活動にも時局柄、制約が加えられるようになる。そのような時期にアメリカ音楽を挿入した華やかなショーの上演を続けるために、宝塚少女歌劇では、科学や健康といったテーマを掲げて健全さをアピールしたり、前線の兵士と銃後の家族の交感を描いたりといった隠れ蓑を用いるようになる。

今日でもレヴューは宝塚歌劇の象徴のように考えられているが、そのレヴューが別の形式に駆逐されようとしていた時期があったこと、しかし後続の形式であるショーにおいても、「歌唱指導」と呼ばれる演出など、一部のレヴューの伝統は引き継がれたことを明らかにした。またこの過程で、歌唱指導の場面は早くも「モン・パリ」の時点で挿入されていたとするファンの記憶に、文献の裏付けを与えた。

##### (2) 大正期の「プリマ・ドンナ」のステレオタイプ形成の経緯

帝国劇場歌劇部の最初のプリマ・ドンナであった柴田環(のちの三浦環)は、帝劇参加以前に離婚が一大スキャンダルとして報じられ、家庭に収まらない奔放な芸術家として一般に印象づけられていた。帝劇の専属女優らも、同時代のメディアには悪し様に評されることが多かった。プリマ・ドンナについて、わがままである、性的に奔放である、家庭的なことに縁がないといったステレオタイプは、今日でも世界的に流布しているもので、欧米圏でもこのステレオタイプの流布について、フェミニズム等の観点から研究が行われている。本研究では、このイメージが日本初のプリマ・ドンナである柴田環にすでに付せられていたという事実に着目し、イメージの源泉を探った。

当時の日本で紹介されていたプリマ・ドンナを主人公とする作品として、『トスカ』(サルドウによるセリフ劇は1889年初演、ブッチーニのオペラは1900年初演)とズーダーマンのセリフ劇『故郷』(1893年)などを参照し、それらの舞台作品が日本でいかに受容されたかを確認した上で、日本における「プリマ・ドンナ」表象には、これら西洋文学からの影響に加えて、前近代の女性芸能者に対する差別が混入していることを指摘した。

音楽劇台本を分析対象とする本研究にとっては周縁的な話題であるが、このトピックを取り上げてまとめたことの意義は大きい。日本語創作音楽劇のうち、特に娯楽性が強調されるようになった大正期の帝劇女優劇、宝塚少女歌劇、浅草オペラでは、プリマ・ドンナや女優やダンサーを登場人物とする作品が多いため、それらの作品を分析する上でプリマ・ドンナの通俗的イメージを確認しておくことは必要であるし、また、分析対象である作品の担い手たちが、当時社会からどのような眼差しを向けられていたかを知ることは、それ自体重要である。

##### (3) 初期日本語創作音楽劇における「諸国漫遊」プロットの反復と変容

日本の洋楽系音楽劇の受容史研究において言及されることの多い3つの音楽劇作品、すなわち、外国人の旅回りの一座によるオペレッタを劇中劇として挿入した河竹黙阿弥の歌舞伎『漂流奇譚西洋劇』(1879年)、益田太郎冠者が川上貞奴の一座のために書き下ろし、のちに帝国劇場でも改訂上演した『唾旅行』(1908年初演、1914年再演)、宝塚少女歌劇初のレヴューである岸田辰彌『吾が巴里よ(モン・パリ)』(1927年)について、プロットの類似を指摘した。いずれの演目も、日本人の一行が世界を旅し、言葉や習慣への不案内からトラブルに遭い、はぐれる者も出るが、最後にはパリまたはロンドンのオペラ劇場またはミュージックホールで再会し、皆で演し物を楽しむ、というあらずじに沿っている。

このプロットは、日本人俳優が日本語で演じる舞台劇に、西洋風の音楽、演劇、舞踊の場面を挿入する口実として都合の良いものであるため、繰り返し使用されたことはさほど驚くには当

たらない。とはいえ、『漂流奇譚』から『モン・パリ』までの約半世紀の間に、このプロットが上演効果をより高め、観客をより楽しませる方向で微調整されていることは指摘しておくべきであろう。また、主人公たちの欧米文化と言語に関する知識、欧米での振る舞いかたなども大きく異なっており、この半世紀での日本社会の変化を示している。

この3作品の他にも、戦後の時代劇ミュージカルに至るまで、日本語創作音楽劇に諸国漫遊のプロットは繰り返し使われており、さらに調査対象を広げての分析の可能性が認められる。日本の西洋音楽劇受容の最初の例である『漂流奇譚』のプロットが、反復し変容を加えられながら、後年に至るまで影響を及ぼしていると言えるのであれば興味深い。

#### (4) 国会図書館所蔵宝塚少女歌劇関連歴史的音源の網羅的調査への着手

国会図書館デジタルコレクション「歴史的音源」に近年追加された宝塚少女歌劇関係のSPレコード音源の網羅的調査は、本研究において当初から予定されていたものではなく、コロナ禍で予定していたアーカイブ調査を実施できなかったために代替的に実施したものであった。しかしこの結果、これまで好事家の間でも原曲を特定できていなかったいくつかの楽曲についてソーステキストを指摘できた。日本を荒唐無稽に描いた作品として日本では上演が忌避されていたサリヴァン『ミカド』(1884年)の1曲が、イスラム世界を荒唐無稽に描いた宝塚少女歌劇のレヴュー『ハレムの宮殿』(1928年、月組)に挿入された事例などは、さらに調査の必要があるであろう。

#### (5) 日本語創作音楽劇というジャンルの再評価

従来の日本オペラ史記述において、日本語創作音楽劇の試みは、名作オペラ作品の原語上演の日本人による実現に至るまでの徒花として、それぞれの時代の散発的なエピソードとして語られることが多かった。しかし本研究が明らかにしたのは、日本語音楽劇の創作において、先人の仕事を参照し、良いところは取り入れつつ、更なる発展と向上を目指してきた作り手たちの姿である。日本語創作音楽劇は決して散発的な試みではなく、日本のオペラ史において通時的に語りうるものであることを示した点で、本研究は隣接するさまざまな分野の研究に寄与しうる成果を残した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 大西 由紀	4. 巻 2
2. 論文標題 紀元二千六百年の“Over the Rainbow” 宝塚少女歌劇「サイエンス・ショウ」を読む	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 早稲田オペラ/音楽劇研究	6. 最初と最後の頁 1-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計7件（うち招待講演 1件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 大西 由紀
2. 発表標題 柴田環をめぐる報道と、日本におけるオペラ黎明期の“プリマ・ドンナ”表象について
3. 学会等名 日本比較文学会東京支部1月例会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 大西 由紀
2. 発表標題 歌で会話を表現すること 佐々紅華のSPレコードお伽歌劇
3. 学会等名 日本児童文学学会5月例会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 大西 由紀、角 岳史
2. 発表標題 日本語訳詞の可能性
3. 学会等名 東京オペレッタ劇場「オペレッタを語るVol.2」（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大西 由紀
2. 発表標題 大団円はオペラ座で 日本の洋楽系音楽劇受容の初期において繰り返し使用されたプロットについて
3. 学会等名 早稲田大学総合研究機構オペラ / 音楽劇研究所2022年11月研究例会 (第206回オペラ研究会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 大西 由紀
2. 発表標題 旅路の果てに見るオペラ 宝塚少女歌劇『モン・パリ』とその前史
3. 学会等名 2022年度大東文化大学日本文学会秋季大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 大西 由紀
2. 発表標題 戯曲のこぼれにおける実験 (< 没後100年の鷗外像 > ラウンドテーブル)
3. 学会等名 日本比較文学会第60回東京支部大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Yuki ONISHI
2. 発表標題 Let's all meet up at the Opera: A plot repeatedly used by Japanese early adopters of Western music theatre
3. 学会等名 Song, Stage & Screen XVI (国際学会)
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 佐藤英、大西由紀、岡本佳子	4. 発行年 2021年
2. 出版社 水声社	5. 総ページ数 379
3. 書名 オペラ / 音楽劇研究の現在 創造と伝播のダイナミズム	

1. 著者名 大西由紀	4. 発行年 2018年
2. 出版社 森話社	5. 総ページ数 544
3. 書名 日本語オペラの誕生 鷗外・逍遙から浅草オペラまで	

〔産業財産権〕

〔その他〕

UTokyo Biblioplaza - 日本語オペラの誕生 <a href="https://www.u-tokyo.ac.jp/biblioplaza/ja/E_00136.html">https://www.u-tokyo.ac.jp/biblioplaza/ja/E_00136.html</a>
---

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------